2P086

アントラセン誘導体とシクロデキストリン包接錯体の構造とダイナミクス (北大院工) 仁戸部 覚・木場隆之・秋本誠志・中野 環・覚知豊次・佐藤信一郎

【序】我々はこれまでに連結アントラセン二量体の量子位相制御について研究して きた¹。 今回は(1)簡便に二量体を得る目的と(2)溶媒や媒体との相互作用を少なくし た環境での二量体を得る目的でγ-シクロデキストリン(γ-CD)中に 9,10-ジメチルアン トラセン(DMA)、9,10-ジクロロアントラセン(DCA)、9,10-ジブロモアントラセン (DBA)を包接させ、その蛍光特性および二量体構造への置換基による影響を研究した。

【実験】CD水溶液中にDMA、DCAおよびDBA それぞれのEtOH溶液を加えて12時間攪拌して 包接錯体を形成させ、定常光スペクトル、円二 色性スペクトルおよび時間相関単一光子計数法 による蛍光減衰曲線を常温で測定した。

【結果】DMA、DCA、DBA/γ-CD 包接錯体の定 常光蛍光スペクトルを Figure 1 に示す。それぞ れの S₁吸収帯で励起した蛍光スペクトルでは、 振動構造を持つ短波長側のモノマー蛍光帯に加 え 554 nm に極大を持つブロードなエキシマー状 の蛍光が観測された。DMA/γ-CD のこのエキシマ ー状蛍光を観測しながら蛍光励起スペクトルを 測定したものと、モノマー蛍光観測で得られた蛍 光励起スペクトルを Figure 2 に示す。モノマー蛍 光観測の励起スペクトルでは 1 本だった S₃ のピ

ークがエキシマー状蛍光観測の励起スペクトルで は励起子相互作用によって2本に分裂した。この励 起分裂は DCA、DBA 錯体でも観測された各試料 について観測された(Table 2)。このことよりγ-CD ナノキャビティ中で DMA、DCA および DBA は 二量体を形成していることがわかった。またエキ シマー状蛍光の強度は DCA > DMA > DBA の順に 強かった。

DMA/γ-CD 包接錯体の円二色性スペクトルを Figure 3 に示す。ホスト分子である CD がキラリ ティを有しているためにゲスト分子であるダイ マーもキラリティを持つために励起子分裂によ る円二色性が観測されたと考えられる。



Figure 2 Excimer excitation spectrum (green line) and monomer excitation spectrum (blue line) of DMA in γ -CD aqueous solution.



Figure 3 Circular dichroism spectrum (red line) and absorption spectrum (black line) of DMA/ γ -CD in aqueous solution.

DCA のモノマー蛍光およびエキシマー蛍 光で測定した蛍光減衰曲線を Figure 4 に示す。 各アントラセン誘導体の減衰曲線から得られ た時定数を Table 1 にまとめた。DCA ではモ ノマーの S₁蛍光寿命が 10 ns であるのに対し、 エキシマー蛍光の長寿命成分は 62 ns であっ た。一方、DBA ではモノマー蛍光、エキシマ ー蛍光帯に対応する観測波長で測定した蛍光

減衰曲線で共通の S₁寿命 2.7 ns が得られた。エ



measured for DCA/ γ -CD complex in water.

キシマー蛍光の寿命は定常光と同様に DCA > DMA > DBA の順で長くなっていた。 またモノマーの S₁寿命が DMA の 15 ns から DCA は 10 ns、DBA では 2.7 ns と短く なるのは重原子効果が Br、Cl の順に強く表れ、S₁→T₁項間交差速度が加速されるた めと考えられる。

 Table 1
 Lifetimes of anthracene derivatives

Sample	λ_{ex}/nm	λ_{obs}/nm –	Lifetime (Amplitude)			
			τ_1	τ_2	τ_3	
DBA	390 ر	434	68 ps (0.16)	910 ps (0.37)	2.7 ns (0.47)	
	ر 390	600	50 ps (0.16)	960 ps (0.12)	2.7 ns (0.72)	
DCA	_ 390	433	53 ps (0.18)	1.2 ns (0.36)	10 ns (0.46)	
	L 390	600	344 ps (0.14)	-	62 ns (0.86)	
DMA	_ 394	430	180 ps (0.27)	1.2 ns (0.30)	15 ns (0.43)	
	L 394	540	73 ps (0.54)	2.7 ns (0.07)	34 ns (0.39)	

さらに実験値からナノキャビティ中におけるアントラセン誘導体ダイマーの配向を 推定するために、蛍光励起スペクトルの S₃分裂幅をもとに励起子相互作用エネルギ ーの解析を行った。励起子相互作用エネルギーを計算で再現できる距離と角度の組み 合わせの中で、Lennard-Jones パラメータを用いた分子間相互作用が極小となる距離 と角度の組み合わせをγ-CD ナノキャビィティ中のダイマーの配向とした。Table 2 に 得られた DMA、DBA および DCA それぞれのγ-CD 中のダイマーの配向をまとめた。

Table 2 Differ structure in γ-CD								
Sample	S_3 Spliting / cm ⁻¹	Distance / Å	Angle / degree	Interaction Energy / kcal mol ¹				
DMA	2230	3.44	37	-9.07				
DCA	2075	3.49	39	-9.25				
DBA	1983	3.49	37	-10.72				

Table 2 Dimer structure in γ -CD

1) S. Sato, Y. Nishimura, Y. Sakata, I. Yamazaki, J. Phy. Chem. A, 107, 10019 (2003)